＜環境と深くかかわっていると感じる場面の事例＞

《一歳児》

事例１　先生になるＢ子

オムツ交換の時、Ｂ子がＡ子のオムツをタンスから持ってきて、はかせようとしている。Ｂ子「Ａ子チャン、ハイ」Ａ子「ヤダー」
Ｂ子「ハイ、ハイテ」　　Ａ子「ヤダー」
Ｂ子「Ｂ子チャンが、ヤッテアゲルカラ」
Ｓ保育者「じゃあ、一緒にやろうＢちゃん」
－２人で、オムツをはかせることに－

Ｂ子は自分でオムツなどはけないのに、Ａ子にはかせようとしていることに驚きました。いつも先生からやってもらう心地良さからか大好きなＡ子にやってあげようと思ったのでしょうか。また、「お母さんみたい」「先生みたい」という憧れや愛情の表れでもあるのでしょうか。Ｂ子は同じ年齢でありながらＡ子との上下関係を感じ取っているのでしょうか？

事例２　Ｓ先生のいない一日

大変な一日になるだろうかと予想していたが、とてもおりこうさん（？）な子どもたちであった。「Ｓ先生は？」と聞いてみた。Ｂ子「アトデ、クルカラネ」Ｒ男「イマ、クルヨー」

Ｓ先生は、子どもたちにとってどんな存在なんだろうと考えました。お部屋の中で、子どもたちにとってＳ先生はお母さん的存在なのだろうと思いました。お母さんがいるからこそ泣いたり、甘えたり、怒ったりできる。いろいろな感情を表現できる子どもたちなのだと改めて感じています。

事例３　ステージづくり

Ｓ保育者と子どもたち。積み木を部屋に運び、その上に立ってうたっている。「♪ドングリコロコロー」からだをゆすり、まるで舞台の上にいるみたい。途中、Ｒ男とＳ子が来ると、Ｂ子にドンと押されあがれず。Ｓ保育者「Ｒ男ちゃん、Ｓ子ちゃん自分で持っておいで」とことこ喜んで持ってこようとする二人。

前日、私も曲にあわせて踊ったりしていて、「ここにステージを作ってあげよう」そう思いました。しかし、Ｓ保育者は、子どもたち自身にステージ作りができるようなかかわりをしていることに気づかされました。一歳児でも「自分でつくりながら」ということができるんだということに気づかされました。

事例４　再現遊び

＜プール＞夏、楽しんだビニールプールを室内にひろげ「わー、プールプール！」と喜ぶ保育者。Ａ子「プール、プール」と中へ入って遊びだす。他の子も。そのうちジョウロなどのプール用具も出し遊びだす。

＜おふろ＞積み木で「おふろはいるか？」とつくる保育者。「オフロ」とつくりだす子どもたち。そして、中に入って一緒に楽しむ。「シャンプー」とＢ子は保育者のひざに抱かれる。Ｙ子、もくもくと泳ぐ。Ａ子、おなかや足の裏をこすっている。

１歳児でも、こんなにちゃんと再現遊びができることに驚かされました。保育者のかかわりが大きく環境の工夫も大切だなと思いました。それぞれが、いろんなイメージをもっていることもうかがえます。実際のことのようになりきって遊び、言葉のやりとりも一緒に楽しむことができました。

事例５　ごっこ

人形さん相手にオムツのとりかえのマネや、ジュースをのませたり、オンブ、ネンネなどが盛ん。しかし、そんな時にジャマが入ったりするのでダンボールの仕切りを「おうち、ハイ」とたてかけてやる。たちまち、うちが何件もでき、「私だけ」の空間を楽しむ子どもたち。

お人形さん相手におかあさんのつもりで遊ぶ子どもたち。誰にも邪魔されず、じっくりと遊べる空間がほしいと考えました。保育者の位置や子供たちの遊びの興味も含めて環境の難しさを感じています。こうした姿をとらえていくことのうれしさも感じることができ、ごっこ遊びだって大きい子と同じくらいできるんだと驚いています。

事例６　砂のプリン

砂場、Ａ子のまわりにたくさんのプリンのようなおわんの型ぬき。私はＳ保育者に「先生つくったの？」と聞くと「ちがう」と言う。Ａ子をよく見ていると、一人で作っていた。おわんをひとかきしてパタッとくり返し・・・。

１歳児で型ぬきなんてできないと思っていました。Ａ子がしているのを見て、ハッとしました。砂をひとかきして、ちょうどいっぱいになる大きさのおわん。それをパタッとするだけでできるということに気づきました。おわん、大小様々な中でこの子達に合ったものがあることで可能になることがあるということを感じ、環境の奥深さを感じました。

《ゼロ、1歳児》

事例1　いすにあがったら見えたよ

「おうっ？なんだ？」いきなり声のほうへと動き始めたみんな。外ではプール開きの真最中。バルコニーの柵越しに見ようとするがちょうど目線の高さに手すりがありうまく見えない。めいいっぱい爪先立ちしたり、柵の間から顔を出そうとがんばっている。Y男「だっち！」と保育者に両手をひろげ、抱っこを要求。突然S男が部屋の中に戻った。そして、ガーガーといすを押して来る。いすに上がり、「おーう」。Y男の視線はプールよりもS男に注がれていた。

大きい子たちの歓声に楽しい雰囲気を感じて、なんとかして見ようというのが伝わってきました。バルコニーは、スズメを見たり風を感じたり、寝転んだりと普段、なにかとかかわりのある、お気に入りの場所です。いつもの場所だからこそ安心して試したり、自分なりに考えて、状況に応じてやってみたのではないでしょうか。Y男が保育者に抱っこされてしまった後、とっさに“いす”と思いついたS男の行動に驚きでした。「おーう」の声はヤッターと言ってるようにも聞こえました。Y男は途中からプールどころではなくS男の動きに釘づけになったのはいうまでもありません。

事例2　こっちのほうが楽しいよ

空になったミルクの缶。中をきれいにし、カラフルなテープを巻いて「ホラ、コロコロ～」と転がしてみる。保育者と何回もやり取りをしないうち、今度は中をのぞきこんだり、しきりに手を入れてみたりしている。
キャップを何個か「ポーン、ポーン」といれてみた。

転がすよりも、缶の中はどうなっているのかなどのぞいたり、手を入れて確かめたりと、そのほうが子供たちの発達において心をとらえていると、遊び様子を見て気がつきました。ビンのふたのキャップを準備。ガチャガチャの音を感じたり、出したり入れたりを繰り返して遊んでいます。子どもとかかわりながら今、興味を持っているのは何かをさぐっていくことが、環境を考えていく上でポイントとなると感じました。

事例3　ゼロさいにも午後のケンソウ！？

夏のはじまりのある日、ごちそうさまをした順に保育者から口のまわりをきれいにしてもらった子どもたち。みな思い思いのあそびをはじめている。後始末等でゆっくりかかわりの持てない時間。チラチラと子どもに視線をうつす。そこにはびっくりするほど集中して遊んでいるみんなの姿・・・「ちょっと、すごいね」「ほんとだー」保育者二人でおどろきながら様子を見守ることにする。

私は、午後のケンソウという言葉を思い出していました。それと同じ光景がここ、ひよ

こ組でも見られ「わーすごい、まだ一歳にも満たない子どもたちも同じなんだ」と感動しました。ゼロ、一歳はとかく家庭環境がすごく園生活に影響しやすいので、午前中眠かったり、朝ごはんを食べてこないとてきめんに機嫌が悪くあそべなかったりがあります。一日のうちで一人一人がこんなに集中できるのはおなかも満たされるこの時間くらいなのかもしれないと思いました。この日、偶然そう感じることができたのですが、もしかしてもっと前からこんな光景がくりひろげられていたのかも。また、こんなふうに感じられるのも保育者自身に少しゆとりが出てきたからかなとも思います。

毎日の流れの中で子どもたちなりにこの時間が心地よく、保育者がそばにいることで安心して、自分たちの遊びを楽しんでいるといったかんじでしょうか。

事例４　ふざけっこたのしーな

テーブルの下にシートをしいての食事がおわり、きれいにふいて、たたもうとする。すかさず、タタタッとＹ男とＫ男がやってきて、シートの上にドンッとのってニヤニヤ。「どいてくださーい」と言ってもぜんぜんその気なし。それどころかバタッと腹ばいになっておもしろがっている。。

困っている保育者をまるであざわらうかのようにニヤニヤ。それも一人だけでなく決まって２，３人しめし合わせたようにやってくる。それも、今だ！それーと絶妙のタイミングで。そういう、かけひきのような事がわかるんですね。そこには、これぐらいやっても大丈夫、おこられないよという安心感、子どもと保育者の深いむすびつきがあるように思います。

事例５　そうか、僕すごいんだよ

ソフト積み木の斜面を、のぼったりおりたりしているＹ男。ひとりでもくもくと、踏みしめている。Ｋ保育者が「Ｙちゃん、じょうず～」と声をかける。みるみるうちに表情が変わった。

私は、うまくなったなあと思ってただ、感心してみているだけでしたが、Ｋ保育者が「すごいね」とその行動を声に出して認めてあげたことでＹ男の表情はぜんぜん違うものになりました。ぼくってすごいんだ、側で保育者が見ていてくれる、その心地よさを感じ、Ｙ男はとてもうれしかったと思います。

事例６　玄関

お部屋を飛び出して、園内おさんぽ。アンヨの子どもたちは裸足でぺたぺた、きんぎょの水槽を過ぎ、向かった先はまっすぐ玄関。「やっぱりここにいたー」と後からベビーカーを押してきたK保育者は笑った。外をながめたり、いすにくつろいだりとしばらく遊ぶ。

玄関は下がコンクリートなので、保育者にとってどうしても“きけん”のイメージがあります。でも、大好きなんです。歩く感触を味わったり、お客さん様のスリッパを片足だけ引っかけて歩いたり。勝手に大きい子たちのズックをもちだしてはいてみようとしたり。そんなことも楽しいことのひとつですが、子どもにとっては、外がよく見えて、なによりも毎日大好きなお母さんと通る・・いわば、おかあさんへのつながりの場所でもあるというのもあるような気がします。

○未満児の環境と遊び、生活について考える

≪一歳児、田仲≫

人的、物的環境が、子供の情緒安定に深く関係していることを感じている。

◎言葉のない（少ない）世界から・・・
◎まっすぐなハートから・・・

子どもの思いに気づいていく

・子どもと一緒に過ごす（あそぶ）中での環境（保育者のかかわり）大きいぞ
・子どもの姿からとらえていく環境（キャッチしていこう）

● 複数担任、長時間保育のもんだいも・・・

≪ゼロ、一歳児≫浅野

環境って大事なんだと、ゼロ歳児に触れてみて改めて感じている。

◎ 物的にかかわるというより、1対1の関係が大きいので保育者が環境となる場合が多い。

だからむずかしい

◎ 見守られていることの安心感を感じ・・・

⇒自ら環境とかかわるようになる
⇒たのしくなる・・・そのくりかえし

◎ 子どもの姿プラス発達からとらえていく環境
● 家庭との連携、

参考資料（２）－ ２.

研修資料；チーム保育における保育者の変容

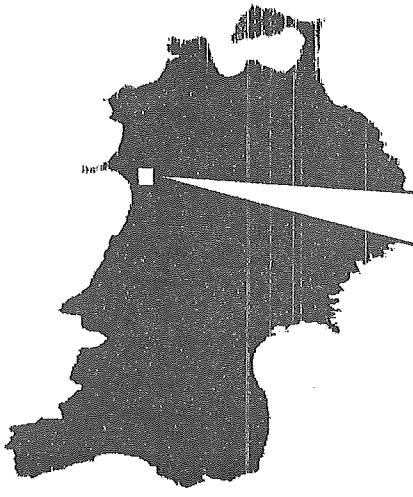
≪　保育の今を考える　≫

第５分科会　　保育の専門性と成長を考える

『チーム保育における保育者の変容』

町立若竹幼児教育センター

佐藤こう子　浅野史子　田仲真紀子



秋田県南秋田郡飯田川町下虻川字八ッ口８０
町立若竹幼児教育センター（幼保一体化施設）

・昭和４８年　幼保一体化施設となる。現在の園児数は０歳児～５歳児まで１４０名である。
・Ｈ１２年１２月園舎新築移転
　５歳児は一年のうちで、２箇所の仮園舎での生活、
　そして新園舎と計３回の引越しを経験する。

はじめに

平成１２年度４月に５歳児クラス２組を２名が担当することになったのだが、途中からクラスの枠をはずして４０人を２人で担当することにした。

この事例は　Ｉ男、Ｒ子のふたりを通して子どもにとっての“がんばることの意味”を探っていこうとしたものである。ともすれば、よい方向にむかってがんばらせてしまう保育者（私）に対して、同じ５歳児担当のＴ先生、仲間のM先生と意見を交わしながら　子どもにとってのふさわしい保育のあり方を考えていこうとしていく中で　チーム保育の良さに気づく事ができたと思う。

保育者Ｋ（佐藤　こう子）・・・５歳児　ほし組　Ｉ男、Ｒ子の担任

保育者Ｔ（浅野　史　子）・・・５歳児　つき組担任

保育者Ｍ（田仲　真紀子）・・・４歳児　りす組担任　保育室がほし組と隣り合わせ

事例１　Ｉ男の変容　～運動会を通して～

普段の遊びの中では大将で、活発で、走るのも速いＩ男が、みんなで活動をしたりする時に行動しなくなる。周囲の子ども達も二歳から同じことを繰り返してきたのでＩ男の行動を当たり前のように見ている。Ｉ男の気持ちを尊重しながら、年長になった事もあり、普段の姿からみて出来そうだと思い　何がこの子をそうさせてきたのか、きっかけを作ってやれば変わらないのか、みんなで行動する楽しさを経験すれば変わるのではないか、等々、Ｉ男は次第に私のとって気になる存在となっていきました。Ｉ男が子ども達の中で主体的に動けるような仲間関係が育つようになるためには、やはり遊びが大事だと思い、子ども達と一緒に遊ぶことを心がけました。Ｉ男はみんなのためにアスレチックの綱を真剣に引っ張ったり、全園児の前で堂々とした態度で踊ったりするようになりました。自信に満ちたＩ男の全身から心の躍動が伝わってくるようで、こんな素晴らしい面があるのかと圧倒される思いがしました。

そして、９月の運動会で例年通り年長児担当のリレーを、やるかやらないか迷う日がやってきました。理由はＩ男にとってリレーは負担が大きすぎるのではないか、走らないのではないかの不安にあって、迷いに迷って決断できずにいましたが、日が経つばかり・・・。そこで、ゴーサインを出したのは若いＴ先生で、他の子の勢いある成長ぶりと、ここがＩ男のふんばりどころ、ここを乗り越えて欲しいという思いと願いが重なってやる事に決定。まず、子ども達に相談し、一方的なやり方でなく、タッチリレーからはじめて、４地点のリレーへと進めていきました。子ども達のやる気とパワーは大変なもので、意外な子が「負けるから悔しい」と泣いたり、普段遅い子がものすごいスピードを出して走って、見ている子を驚かせたりしました。しかし、案の定Ｉ男は走らない、そんなある日、手をつないで走ってみました。嫌でもなさそうだ。もしかしてこうやってくれるのを待っていたかもしれない。そんなことを続けながら、子ども達に「みんなの運動会なんだから、みんなでなんとかしてー」と訴えました。まもなく、Ｉ男の手を引っ張ったり、背中を押したりして、自分達で次の地点まで走らせようとする姿がみられました。そして、最後、片方の手で顔を隠したりしながらも、Ｉ男本来の遊びの時の猛スピードの走りをみせ、見ていた子ども達を「Ｉ男、はしったー」と感動の渦に巻き込んだのです。

運動会本番、大勢の観衆を前にして母親の陰に隠れてしまいました。ここにきて術を失った私はＩ男をＴ先生にまかせて、成り行きを見守ることにしました。みんなが固唾を呑んで見守っている中スタート。Ｉ男は私と手をつないで全速力で走りました。

シール　～シールの存在は子ども達にどんな意味をもたらしたか～

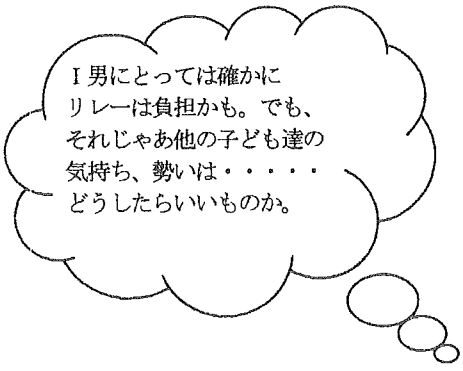
運動会練習が始まって数日たったある日、フリーマーケットで買ってきたシールをなにげなく「一番がんばった子にあげたいなあ」と言って壁にピンで留めました。７枚綴りの少し大型のシールで、中でも一番大きいのが光って見えました。「この一番格好良いのは誰がもらうんだろうなあ・・・」それっきり毎日の練習やら何やらで、シールの事はすっかり忘れていました。

運動会が終わって二日後、「先生、シールどうするの？」という声に、「あっ、そうそう…」と気のない返事をしました。感動的な終わり方をしたはずなのに、時間が経つにつれてＩ男ことが込み上げてきた。前の日まで少しずつ変わってきて、本気をだし、理想的な展開をして、本番では、あらゆる困難を乗り越えたＩ男と私、「ヤッター」の瞬間を披露できるはずだった。それが何だ！母親に会ったらダメになってしまって…そんな訳で気が乗りませんでした。しかし、シールのことをしっかり覚えていた子ども達の言葉にやらないわけにはいかなくなりました。

私、「運動会は終わりました。とってもみんながんばった！棒体操、リレーすごかったー。そこで、約束していたシールをあげたいと思います。まず、一番大きいピカピカシール、誰にあげたら良いと思いますか？」Ｓ男「先生決めればいいじゃん！」　Ｎ子「私たちだってわかんない！」　私「先生だってわかんないよー。みんなは誰だと思う？」と押し問答。そこで、Ｒ子、Ｎ子「Ｉ男」「Ｉ男凄かったー」　私「一人で走らなくてもすごいと思う？」　みんな「うん！踊りもうまかったもん」。「Ｄ男もすごかったー。Ｋ子ちゃんもすごかったー」口々にがんばった、すごかったと感じられた友達の名前を矢継ぎ早に発する言葉は、実に的を得ていて、的確に捕らえていて、タジタジになりました。なんということだ！いい加減な気持ちで立ち向かえないぞ、ここで私は最初の中途半端な気持ちを急激に立て直すこととなりました。そこで、Ｉ男の場合、どうしてすごいと思うのか聞いてみました。「最初、走らなかった。だんだんと走った。本番走らなかった」なんとぴったりの表現ではありませんか。子どもだと思って軽く見てはいられない、と思いながらもう一度確かめてみました。「Ｉ男は遊んでいるとき、速く走れるけど、時々固まってやらないよね。でも、練習の時だんだん走って本気だした、ビューンって走れた、でも、本番は先生と走った。それでもすごいのかな？」みんな、すっきりと納得した表情で「うん」と答えました。

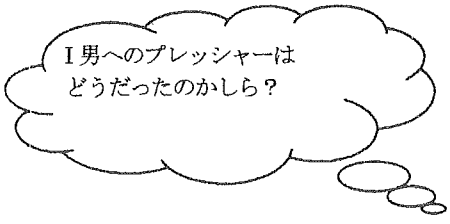
私、「じゃあ、次にあげる人誰だと思う？」Ｒ子「Ｋ子じゃあない？いっつも私より遅いのに、私とこぬかした」「本気だしたー」私「今度は？」「Ｔ男じゃない？運動会の時、気合いれてギャーと声を出して走った。」

どれもこれも大人と同じように感じていることに驚きました。Ｔ男は本番本気を出しバトンを受け取ってから、「ギャー」と叫び声を上げながら走って見ている人を感動させました。中でも、お母さんの喜びようは大変なものでした。次に私とＴ先生は、消極的で目立たない子を選びました。最後に一枚残りました。Ｍ男が「欲しい欲しい」と叫んだ。しかし、みんなが言った。「Ｍ男だけ欲しいんじゃない。みんなだって欲しいんだ。みんな我慢しているんだ。」と叫んだ。続いて、Ｙ男が「僕達には、何もないってこと？」Ｈ子「いいじゃん、トロフィーもらったもん」Ｒ子「いいじゃん、他のものいっぱいもらったもん！」



【事例を通して感じた事】～保育者Ｔ～

・最初は、なぜリレーをやるかやらないかであんなに迷っているか理解できませんでした。というのは、まわりの子ども達があれほど盛り上がっているのにＩ男のことを気にかけてやらないというのは他の子が果たして納得するだろうか・・・たった一人のためにそこまでする必要があるのだろうか・・・私にはそんな思いがありました。だが実際今のＩ男の姿からしてリレーは荷が重過ぎるかもとの思いもあり　また‘5歳児といえばリレー‘と当たり前のようにやってきた事を今年は？とＩ男のことを思うがため見直そうとして非常に悩んでいるＫ先生の気持ちもわからないでもない。一概には言われない「あえ～なんとしよう・・・」といったかんじで私自身も随分と迷ったような気がします。二人でいろいろ話しあった結果やってみる事にしたものの。途中いろいろな困難もあって悩んだ時もありました。がその時々で子ども達と話し合いをもち、“自分たちの運動会なんだ”と張り切る姿をみて徐々に迷いは消えていったように思います。Ｉ男の気持ちの変化の裏には　常にＩ男の気持ちに寄り添い、出たり引いたりして見守っていてくれる先生とそんな先生の姿をみてＩ男の事をまるで自分の事のようにドキドキしたり心配するあたたかい子ども達の想いがあったように思います。
・何気ない“シール”だったはずがみんなの心にはしっかり存在していた事に正直驚きました。（私はすっかり忘れていた・・・）もしかしてシールが欲しくてがんばったのだろうか。いやそれだったらきっとどの子も持てる力を一生懸命発揮したので僕も私もと主張してもいいはず。ともにがんばってきた仲間だからこそ、そして日頃の状態をよく分かっている仲間だからこその子ども達の見方だったように思います。実際にあのシールの話し合いの現場にいて　子ども達の表情や言葉に触れた時は、【子どもってすごい、友達の事をここまであたたかい気持ちで思ってあげれるのか・・・】とも思いました。リレーをやって良かったと思った瞬間かもしれません。



【事例を通して感じた事】～保育者Ｍ～

・Ｉ男はなぜ　みんなと同じことをしようとしなかったのか、そばで見ている私も気になりました。Ｉ男にとっての何がそうさせていたのか原因を探り、そこを何とかしたらやれるようになるのではないだろうか・・・そんな思いがしましたが、実際Ｉ男の場合は、何が原因というものを探ることはできませんでした。保育者がＩ男の気持ちをどんなふうにとらえていたのかによっても　かかわり方がかわってくると思われました。しかし、この場合はＩ男に対しては、保育者の思い、願いが強く込められているように感じます。本当にがんばらせなければいけなかったのか・・・？保育者の思い、やがては友だちからの思いがＩ男にとってはプレッシャーになっていたのではないだろうか、という見方もできるように思います。
・何気なく与える事となったシール。このシールの事例をはじめて目にした時、「物を与えること」に対して考えさせられました。シールをあげる事にしたので子ども達はがんばったのだろうか？また、もうひとつ、シールを与える場面で保育者ははじめて、周りの子ども達のＩ男を見る目や友だちを認める目に気づいているようによみとれます。「シールを与える」ということがなかったらそのことには気づかずにいたのでしょうか・・・？

事例１の考察　～保育者Ｋ～

運動会の励みにでもなればいいなと思って買ったシールが、Ｉ男を含めた４０人を誰が一番がんばったかを、しっかりとらえようとしていたことに驚きました。そして、毎日の練習の中で互いにやる気を出して刺激しあっていくうちに、表面ではなく内面、出来る結果ではなくプロセス、何よりもあたたかい見方、心が子ども達一人一人の内側から脈々と生じてきたのではないでしょうか。そんな中でもＩ男をどの子もしっかり良くみていたことに感心しました。振り返ってみると、練習の時私と手をつないで走っていたＩ男を　途中子ども達に任せた、その時から自分たちの仲間の事、こうしてはいられない、自分たちでなんとかしよう、という気持ちが育っていったのではないかと思います。そのうちにＩ男の変容ぶりがあまりにもすばらしく目が離せなくなった、あのＩ男がこういう風に変わっていくのか、すごい事だ、と心が揺さぶられていったのではないでしょうか。

Ｉ男に「やれば出来る、一人でなく手伝ってあげるから」の思いで進めてきた運動会までの道のり、いろいろありましたが、Ｉ男を含めた４０人、みんなどこかでその子なりのがんばりをみせました。今回、私はＩ男をがんばらせてしまったけど、主体性を尊重してゆっくり待ってやればよかったのか、Ｉ男にとってどうだったのか分かりません。しかし、やるだけやった、すっきりした、Ｉ男も自信たっぷりだ。そしてみんなも自分というものを出して遊びや生活が出来るようになったことが、大きな収穫ではないかと思いました。

事例２「がんばる苦しみ」を背負ってしまったＲ子

食べ終えた給食のワゴンを押して玄関前を通ったら、か細い泣き声らしき声が聞こえてきました。その事が気になって急いで食管を置いて来てみたら、それは私のクラスのＲ子でした。靴箱の陰にべったり座って泣いている。泣きながら手を振りかざしてなにやら狂ったように言っている。「がんばる、がんばる、がんばる」と呪文のように繰り返している。すぐ給食の事だとわかりました。急いで私は「がんばらなくてもいい、残してもいい」とＲ子の言葉を撃ち消すように叫びました。しかし、「できなかった自分、がんばれなかった自分」を身体の中に取り込んで、自分自身を責めて痛めつけているＲ子には何を言っても無駄でした。耳に入りませんでした。この場に至って全身全霊で出来る限りの事をしようと思い、「がんばらなくてもいい」と口にしながらＲ子を抱き締めようとしたけど、物すごい力で振り切るし、この子を救う術を瞬間見失いました。狂ったように「がんばる」の言葉が止まらない。どうしよう、何とすればいい。咄嗟に頭の中を映像のように流れたのは、３日前から苦手な野菜が食べれるようになって、その次の日も全部食べて、小学校を目前にして「苦手な野菜を食べれるようになったＲ子」とみんなに大々的に紹介して、お母さんにも連絡ノートで「こんなにも食べれるようになって・・・」と大いに自信を持たせたつもりが、こんなにも「がんばらなければいけない」と自分を追い詰めて、追い込んでしまっている。こんなに思い詰めてしまって・・・かわいそうに・・・私のせいだ、そうだ、こんなにＲ子を苦しめてしまったのは私なんだ、Ｒ子が悪いんじゃない、私が悪いんだ、そうだ、そうなんだ、と思った瞬間、すぐさま膝まづいて叫んでいました。「こう子先生悪い！こう子先生悪い！Ｒ子ちゃん悪いんじゃない、私が悪いんだ！」。この言葉を私も狂ったように叫んでいた。心の底から自分がいけないんだ、あなたをこんな状態に追い込んでしまったのはこの私なんだ。ごめんなさい、ごめんなさい・・・。

Ｒ子はやっと私の膝にのってくれました。そしてふたりはしばらく抱き合いました。言葉もありませんでした。そして、抱き合いながら保育室に向かいました。まるでお互いの傷をなめ合うかのようにして・・・。

その日、Ｒ子はひとり離れたところに布団を敷いてお昼寝した。私には、その気持ちが痛いほどわかりました。

ヤッターの体験をし、うれしそうだったＲ子。
でもその背景にあったものは･･･

「事例を通して感じたこと」～保育者Ｔ～

普段はみんなの前で堂々と意見を言ったりするなど積極的なＲ子だったので自分でも食べれるようになった事をかなりの喜びとしているようにみうけられました。Ｒ子だけではありません。何か子ども達全体が小学校へ向けての勢いと相まって今なら何だってできるという雰囲気に包まれていたような気がします。そして、今のこの子たちならだいじょうぶという保育者側の過信もあったかと思います。そのような状況の中だったので　あの日の玄関から戻ってきた二人の姿を見た時はショックでした。一緒になって“がんばれ”“すごいなあ”コールをしていただけに今自分はどうすればいいのかを見出せずにいました。と同時に　Ｒ子はあんなふうにさらけ出したけどもしかして他の子でも同じように感じている子がいるのかもしれないとも考えました。試みは三日でやめになりました。Ｋ先生はかなりの時間をＲ子と過ごしました。私はそんな二人をただ見守るだけしかできませんでした。その場の二人にしか分からないそんな空気がそこにはあったのです。

Ｒ子の「やってやるぞ」「がんばれ自分」というものすごいエネルギーを感じる！でも、誉められることでつらくなる自分の存在もチラホラ

【事例を通して感じた事】～保育者Ｍ～

この事例の中では、Ｒ子が自分を「がんばる」と言ってます。これはとてもすごいものがあるのではないでしょうか。　自分で自分をはげましている・・・なかなかできることではないような気がします。Ｒ子が何かを感じとっていることが伺えると共に、とても意地のある子だなと感じました。

Ｒ子にとってこの時、がんばることの後押しには先生、友だち、家族が複雑にからみあっていたように思われます。Ｒ子もうすうす気づいていた自分だけの問題であったことが、まわりからのはっきりとした形であらわれだし、Ｒ子を大きくゆさぶったのではないでしょうか。Ｒ子の性格がこのような場面を生んだともいえそうです。何もなければ、なにもないまま終わっていただろうともとれますし。そう考えると　この事例を通してＲ子に与えた影響は意味を持っているのではないでしょうか。また、保育者にとっても大きな意味があったように思われます。どれだけ子どもの思いに気づいているのか？どのようなかかわりをしてきたのか？自分を省みたり、深く考えたり。その場ですぐに結果のでないこともあります。後になって気づく事の方が多いのかもしれません。こうした場面をたくさん経験し自分を省みながら子どもにむかっていくことが保育者を変えているもとになっているのではないでしょうか。

事例２の考察　～保育者Ｋ～

「野菜嫌いな子」の多い年長の子ども達を、このまま小学校に送ることが正月休み明け急に気になりました。野菜を食べないことに何の手立ても取らなかったと思われるのでないかとこだわってしまったんです。そこで「もうすぐ小学校だから野菜をがんばって食べれるようになろう」と話しました。その日の食管はからっぽになりました。気を良くした私は子ども達全員を褒めたたえ、「がんばれば何でも出来る」と力が入りました。特に野菜の嫌いなＲ子がみんなと同じように食べれた事は驚きですごいことだと全員に紹介して、家庭にも連絡ノートで知らせました。一年生になることを、特別意識してきたこの時期なので、「野菜嫌い」をなくす絶好のチャンスのように思えました。

しかし、Ｒ子の心の中は私が考えるほど単純ではありませんでした。かなり前から「小学校」に行く事のプレッシャーを感じて「しっかりしないといけない、がんばらないといけない、勉強もある」そんなことを考える心が想像を遥かに上回って育っていたのでした。そこで、苦手な野菜の話が出されたからたまらない、カチンときて、「ようし、がんばってやる」「こんな物、ばぐって食ってやる、目をつむって食べれば大丈夫。」と持ち前の負けん気で飲み込んだ。「ヤッター案外簡単じゃないか。」こんな容量で一日目、二日目と成功した。みんなの前で誉められて、家の人からも誉められて、気分は絶好調、全てがうまく事が運ばれているようなＲ子でありました。

３日目、とてもじゃないけどＲ子が食べれそうもないおかずが出てきたので「今日は残してもいい、無理をするな」と話しました。しかし、調子づいているＲ子は簡単には諦めませんでした。食べよう、がんばろうとする気持ちが先に立ち、無理して口にするけれど身体が受け付けない、言う事を聞いてくれない、やっぱり駄目だ、食べれない、悔しそうに、残念そうに、むっつりした表情で食管にお皿のおかずを空けました。しかし、このことはＲ子のプライドをかなり傷付けていたのです。何年も「野菜を食べれない自分」に対し、かなりの劣等感を感じていて、この二日間で乗り越えれた、なのに今日はがんばったけどどうしても食べれなかった。あんなにみんなの前で紹介されて、晴れやかな気持ちになれたのに、今日、再びどん底に突き落とされてしまった、もうこの場にいられなくなったのだ。そして誰もいない靴箱の陰に隠れた。一人になりたかったのだ。一人になったら涙が流れて止まらない、今までがんばってがんばって今日まできたのに、ここで駄目になってしまった、こんなにこんなにがんばったんだよ、それなのにどうして今日食べれなったのよー、どうしてよーＲ子はこんな気持ちに陥っていったのではないでしょうか。

そんなことになっていたと知らずに、いつものように給食室に向かう私の耳に入ったかすかな泣き声、その声に引っ張られるようにして行ったこの偶然に感謝をしています。

がんばることとは･･･

～保育者Ｋ～

Ｉ男とＲ子は年長組になるまで、「みんなと一緒にやらない子、野菜を食べれない子」を自他共に認め、それを当然のようにして生活してきました。しかし、二人の心のどこかにできるようになりたい、みんなと一緒にやってみたい、そんな気持ちがなかったものか、もしかして、きっかけを作ってやれば乗り越えることができないものか、と随分悩みました。一方では、「主体性」「その子の思い」が大切、尊重されるべきだという考え方もあるが、二人の育ちを見て果たしてこのままでいいものかと、強く疑問を感ずるものがありました。

そこで、子ども達と、保育者が一緒に、応援したり手伝ったりしながら、いろいろなことを手探りながらもやってみたことで、Ｉ男は少しずつ動きはじめ見ている子ども達に感動を与えるほどに変わっていきました。Ｉ男は真剣に自分のことを考えてくれる人間に初めて出会い、「ここが自分のがんばりどころ」と全身で感じたのかもしれません。

Ｒ子は野菜を食べれない劣等感を克服したい気持ちが、あの時強く揺さぶられがんばって食べたけど、三日目にしてまたもとに戻ってしまった。やっぱりダメな自分と思い知らされ、強いショックを受け「がんばる」ことが苦しみに変わってしまいました。

私達は毎日の保育のいろいろな場面で、「がんばれ」の言葉を、多くの子ども達に投げかけています。しかし、「がんばる」ことの受け止め方は、その子のそのときの置かれている状況や、その子の抱えている問題によっても違います。チャンスになったり、負担になったり、様々ではないでしょうか。そして、何気なく投げかけている「がんばれ」の言葉をＲ子のように受け止める子もいることを意識しながら、がんばったができなかったときには、支えてやるあたたかさが大切ではないかと事例を通じて感じました。

～保育者Ｔ～

子どもにとってがんばるとは今以上の力を発揮してみることではないかと考えます。がんばって出来たからすごい、出来なかったからダメだということではなく、その過程でのその子なりのがんばりを認めたり見守ってあげることが大切な事ではないかと思います。「あー自分を見ていてくれたんだなあ」「よし、やってみよう」などのやる気につながり　やがて大きな実を結ぶのではと考えます。ただ「がんばれ、がんばれ」と、口で言うだけでなく子どもは一人一人皆違うので状況を見極めた上での援助を心がけ、それが子どもにとってどうだったのか、そして挑戦してみてどうだったのかを見ていく必要があると感じました。特に全体になげかけたときには一人一人の反応の度合いや様子が違ってくるので気をつける必要があると感じました。“がんばる”という言葉は励ましにつながる言葉であると同時に　相手に目に見えないプレッシャーを与える言葉になる事もあるのでとても難しいと改めて考えさせられました。

～保育者Ｍ～

２つの事例から、がんばることについて考えさせられました。子どもの思いを受け止めながらも、がんばらせたいという思いの保育者。できそうだ、自信をつけさせたい、とそこへ込められる保育者の思いもあって、先の見えないことだけに、かかわりはむずかしいと感じました。その子の気持ちの変化を読み取り「この子にとっては」「クラスにとっては」「私は」といろいろな角度から省みながら、それに答える繰り返しが大きなカギになっているような気がします。

自分で自分を励ますというエネルギーと相対して、がんばろうとする自分に追いつけない自分があって、子どもの中でそれが共存しているように読み取れました。がんばるということは、とても大きな山のようで、精神的に自分との戦いの意味も含んでいるような気がしました。

チーム保育について

～　保育者Ｋ　～

保育が楽しい、子ども達に会いたいと思えるようになるまで、何年かかったでしょう。やっと自分なりの保育を掴みかけたとき、Ｔ先生と５歳児担当になりました。Ｔ先生の第一印象は子どもが好きで何でも話しやすい、保育に対してひたむきな情熱がある人だと直感しました。そして、私が今まで経験したこと、感動したこと、失敗したこと、何でも話せる関係になりたいと思いました。しかし、本当にこれでいいか分からない自分のやり方に、熱心に保育に夢中になってくるＴ先生に、戸惑いや不安、責任とプレッシャーも感じました。そこで40人の子どもと私達二人がひとつのチームになり、一緒に何でもやっていこう、子どもと共に成長したいと思った時、気持ちが楽になりました。子ども達から教えられること、私達が教えることを何でも話し合い、相談してやってみよう、困ったことがあったらみんなで助け合おうと訴えていきました。子ども達は私が考えた以上に思いがけない育ち方をして成長し運動会の場面では本質を見る何よりも暖かい心が育っている事に気づいた時、急激に私自身の変容が迫られました。私を成長させてくれるのは、他でもない子ども達だと確信しました。

Ｔ先生とは親子程の年齢の差があるので、一方的にＴ先生を引っ張ってしまったり、話しにくい事もあると思い「落書き帳」を設け、気が付いた時に何でも書くようにしました。そして何でも相談し、話し合う事で、お互いに刺激しあい高め合うことを心掛けました。しかし、一番の悩みはＴ先生の持ち味や保育に対する情熱を、どのように伸ばして方向付けていくかにありました。ここが私の「がんばりどころ」でありました。まず、自分がもっているあらゆること、出来る限りの保育の情報を伝えながらも、大切な事は目の前の子どもに深く係わっていくことを実践の場で訴えていきました。そのやり方や方法は手探りながらもＴ先生の変貌ぶりは素晴らしく、目を見張るものがありました。

そんな中、私達二人の保育者とは全く違う視点で物事をみるM先生が近くにいました。Ｔ先生とは同年齢ながらもこせこせせず、大きな見方をして「なあに、そんたごど、気にするな」の一言で随分救われた事もありました。保育の中でいろいろな考えの人がいて、冷静な目で見てくれたり、視点をずらしてくれたりする人がいることは、二人にとって貴重な存在でした。いつの間にか、M先生は自然な感じで仲間となり、保育にのめり込んでいったのでした。保育を語ることは、二人よりも三人の方が自分に大きさ、広がりのようなものが出てきた事を実感しました。

今年四月、M先生が三歳児を担当、「ねえねえ、きいて！・・・ちゃんがこんなことしてね」と目を輝かせて夢中になって話す姿に、私は寒気がするような感動を覚えました。「ちょっと一M先生、一人前の保育者になってきたみたいだな」とＴ先生に事あるごとに漏らしていました。Ｔ先生もまた、一人歩きして自分なりの保育をひたむきに探っています。

～　保育者Ｔ　～

自分より年上の先生にはやはりおもうような事が言えなかったり遠慮してしまうところがありました。一番つらいのは今まではこうやっていたから・・・と言われる事だったように思います。そんな事だと意見を言いたくても言えなくなってしまうのです。その点K先生は保育は常に変化しているもの、それに合わせて自分を変えるとアンテナを張り巡らせどんな意見にも耳を傾けてくれる、相手に威圧感を与えない、話しやすい雰囲気があったように思います。だれよりも子ども達が一番それを感じていたのかもしれません。

～　保育者Ｍ　～

二人の保育を見て感じたこと・・・

年長児２クラス、クラスの枠を越えて、保育者同士がよく話し合いながら保育しているなと感じました。子ども達に真剣にむき合っている、とにかく、よく子どもの話をしている二人・・・。子どもへの見方や考え方の幅が広がり、そして深まり、保育することのおもしろさを感じていたように思いました。

おわりに

今回、チームで保育する、お互いに考えを出すことで今までにない保育の楽しさ、広がりが出てきたように思いました。日々の子ども達とのかかわりを大切にし、今後も自分自身、保育者としてのあり方を探りながら向上していくことが大切ではないかと思っています。

参考資料（２）－ ３.

実践研究クラスたより；

ーロボット・カミィの保育実践が
保護者との連携によって家庭でも展開していく過程ー

① 事例２　つき組の仲間、ロボット・カミィ

② つき組のお家の方へ　６月２９日

③ つき組のお家の方へ　７月２日

④ つき組たより　～カミィ　ナンバー３　７月２０日

事例2　～つき組の仲間、ロボット・カミイ

保育者は子供たちになんのきなしに紙芝居『ロボット・カミイ』を読んだことがありました。忘れた頃、絵本もあることに気づいた保育者は、自分が好きな本ということもあってそれを午睡の時に読んでいきました。長い話なので数日に分けて読み聞かせしていきました。

子どもの姿

①絵本の中のカミイを作る！

ホールでダンボールをかぶったりしていたＹ男が「先生、ロボット・カミイ作りたい。」と突然部屋に入ってきました。「え？」と私はびっくりしました。Ｙ男が「箱ちょうだい。」というので、部屋にあったダンボールをいくつか差し出しました。クラスの何人かも加わりＹ男を中心としてのカミイ作りが始まりました。

Ｓ男が「先生，切って。」と長い箱を持ってきました。Ｓ男は「足にするから、半分にして。」と言います。正に足にぴったりといった感じの箱です。１本しかないからどうするのかと思っていたら、さすがＳ男。私はＳ男のいう部分で切ってやりましたが、バランスが少し悪そうでした。同時進行でＹ男は頭の部分を付けています。「誰か、ガムテープけれ。」とＹ男が言うと、Ｔ男たちがガムテープを切って手渡してくれ、支えてくれている人も何人かいました。頭がくっつくとＹ男は本を見ながら目を書き込んでいきました。Ｓ男は「いやあ、カミイできた。いたずらだや～どうする？」Ｙ男も「動いたら、どうする？」とカミイの出来上がりにわくわくしているようです。Ｓ男の方も足の部分を付け終わり立たせていました。「あれ？立たない。」カミイが立たないことにＳ男とＹ男は少しがっくりした様子でした。そこで、私は手をかしました。頭と足の付け根の位置がうまくないようです。バランスが少し悪いからとつけ直してやりました。そっと手を離して再び立たせてみます。「あっ、たった。」と周りのみんなと顔を見合わせている子供たちでした。「あ～これ、一緒に昼寝とかご飯とかせばいいな。」「んだ。つき組の仲間になって良かったな。」というＹ男とＳ男の声が聞こえてきました。

Ｓ子が「ねえ、ビー玉入れた？」と声をかけてきました。Ｙ男「あ、んだ。ビー玉ねえや。」Ｇ男「家に行けば、あるけどな。」Ｓ男「あっ！ビー玉あった。金ちゃん。」と部屋にある金魚の水槽を指さしました。私は「あ～本当だ。欲しい？」と一つ取り出してやりました。こうして、カミイの身体の中には”涙の元”が入ったのでした。

②カミイとの給食の時間

Ｙ男の席の側にカミイを置いての給食となりました。Ｙ男がカミイの手にスプーンを持たせたり他の子供たちがカミイの口に自分のカレーを食べさせたりしていました。給食中

の会話は「カミイ、昼寝するの？」「布団は？」「布団ねえや。」「ままごとの布団使えば？」「カミイ、学校に持って行ってもいいのかな？」「ダメって言われるんでね。」「先生、いいの？」「チビゾウもつくればいんでね。家もつくるか？」「カミイの家族つくればいいじゃん。」とカミイのことでいっぱいでした。

③カミイ持って行きたい

Y男は午睡前にお迎えとなっていました。「先生、Y男くんカミイ持っていくって、いいの？」とA子が私に聞きにきました。S男は「ダメ、みんなのだや。」と言います。Y男「・・・」私はみんなはどう思うか訪ねてみました。いいよと言う人とダメと言う人とがいます。Y男は下を向いてしまっています。私は悩んだ末、「じゃあ、今日はカミイ,Y男くんのお家にお泊まりで～す。」と言いました。この日、カミイはY男宅に泊まりました。Y男は母に「明日は、S男の家にお泊まりだ。」と言ったそうです。

■感ふとり

① 絵本の中にでてきたカミイを作りたいというY男の思いに驚きました。まさか、そんな事を言うなんて思ってもみなかったのです。イメージにつながるようにと、出来るだけ大小、形の様々なダンボールをと思いましたが部屋にあるあり合わせとなってしまいました。S男が足にすると言った箱は１つしかなかったため、どうするのだろうと私は思いました。反面、子供たちはきっと何か良い案が浮かぶに違いないという期待もありました。S男が１つを半分にして使うという事を思いついた時はすごい、さすがと思いました。こちらもワクワクしてきます。Y男を中心としてたくさんの子供たちがこれにかかわっていました。ガムテープを切ってくれている子、支えてくれている子、見ている子、絵本と比べている子と様々で、気持ちは一つになっているように思いました。

また、Y男とS男は作りながら絵本のカミイを思い出していることを感じました。作りながら完成を楽しみにしている様子が伝わってきます。「いたずらだや」「動いたらどうする」とすでにカミイの完成とその後を想像している二人を見ているだけで暖かい気持ちになれました。それだけに立たせることに失敗した時のかかわりに迷いました。ここでチャンスと思って、どうして立たないのか考え合えばいいのか、それとも二人の完成させたいという思いを受け止めればよいのか・・・。

完成するとY男とS男が『つき組の仲間』としてカミイを受け入れようとする気持ちを感じ、またまた胸が熱くなりました。子供たちって、すごい！また、『涙の元』に気がついたS子にも感激しました。

② 給食時間になり、Y男とカミイ、そしてみんなとカミイが一緒に食べていました。食べるはずのないカミイに喜んで「食べた。」といって代わる代わる食事をさせていく子供たちの姿に圧倒されました。もう、なにも言えなくて、ただただ、「この子たちって、すごいんだ。」と感激していました。食事中の会話もカミイの事で、私も喜んで話しに加わりました。特に、「学校に持っていってもいいか」と聞かれたときには、そんな所まで考えているんだと驚きました。

③ Y男がカミイを持って帰ると言った時には私は悩みました。どのようにしたら、みんなが、そしてY男が納得するんだろうかと。Y男はどうしても持って帰りたいという思いが強いよ

うに感じました。「みんなのだ」とＳ男が言ったり、みんなにどうすると私が話したりしている最中のＹ男の表情はどんどん曇っていき、気の毒に思える程でした。作ったのは確かにＹ男です。でも、そこにかかわったのはＹ男だけではありませんでした。その子たちには、みんなのものだという思いがある事も感じました。そこで、とっさに「お泊まり」という言葉を思い浮かべました。Ｙ男にとって良かったのかどうか。また、次の日はどうなるのかという不安もありました。しかし、Ｙ男が自宅で「明日はＳ男の家にお泊まりだ。」と言ったという事を聞いて、なんてＹ男はステキなんだろうと感激しました。

■考察

私は、何の思いも意図もなく読んでいた紙芝居『ロボット。カミイ』でした。なにより自分自身も好きな話だからと絵本も読みました。

そのため、子供たちの突然のカミイ作りにビックリしました。子供たちは、自分もカミイ作りに加わりたいとガムテープをひたすら切ったり、絵本と見比べることで作ってる気持ちを共にしていたり、眺めているだけでも気持ちはもうそこに集中していたりとＹ男を中心としてみんながカミイの誕生を望んでいる思いが伝わってきました。作り上げて行く中で、みんなの心の中にはカミイがいて、絵本の中にすっぽり入り込んでいるかのようです。絵本の与える力はすごいものだと、また、その夢のような世界に入り、楽しめていける子ども達のすばらしさに感動しました。

カミイとの生活が始まり、いろいろな場面で子供たちにどのようなかかわりをしたらよいのか考えさせられながら過ごしています。長く迷っているわけにもいかず、一瞬一瞬で判断しなければなるません。どちらかというと私の思いを入れ込んでの言葉掛けやかかわりになってしまったのではないかと思う所もあります。「お泊まり」と言う言葉をかけたあと、『明日』という事を少し意識してしまいました。泊まると言うことは帰ってくる？大人の感覚で言ったように思います。Ｙ男がカミイを家に持ち帰った後も、考えていました。「明日、Ｙ男くんが持って登園してくるだろうか？」「もし、持ってこなかったとしても、それはそれでもいいじゃないか。」「でも、他の子達はなんて言うかな。」「そうなったら、その時みんなで話し合えばいいし。」と心の中で自分の気持ちを整理していました。Ｙ男にすれば自分だけの物にしてしまいたいという思いがあったかもしれません。でも、「明日はＳ男の家にお泊まりだ。」と言ったＹ男の中では、自分だけではなく、友だちにもこのおもしろさを味わわせてあげたいという思いを持っていたのではないだろうかと思いました。

そして、それから子供たちはこちらが考えつかないような事ばかりを繰り広げていきました。遊んだりするときは知らん顔なのに、給食や昼寝、おやつなどになると、Ｙ男が先になって自分たちの中にカミイを入れるという姿に驚き、子供たちの純粋さに改めて触れることができました。カミイに食事や昼寝をさせる子供たちの姿を見て、絵本の中から『カミイをとりだしてきた』という感じに見えました。これから、カミイはどうなるのだろうという楽しみが私の中には芽生えていました。

3その後の子どもの姿

子ども達の家へ泊まり歩くカミイ

翌日は Y 男宅から登園のカミイ。カミイが来ると「来た！」と何人か喜んでいます。遊びになるとカミイは部屋の中にポツリ。しかし、給食や午睡になると Y 男が先になってカミイを仲間に入れていきました。「カミイの分は？」と Y 男が気づき、給食とおやつは一人分増やしてもらいました。給食の先生が「新しくつき組に入った子、どれ？」と見に来たくらいでした。

昼寝もY男の隣で、ままごと用のタオルをかけておやすみしていました。

また、カミイの家作りたい、ちびぞう作りたいと言う子供たちの思いがあったので近くの電気屋さんに大きなダンボールがあるかもしれないと話しました。すると、子供たちは歩いて取りに行くと言いました。そこで、確認の電話をしてみましたが、残念ながらないとのこと。しかし、少しして電気屋さんは、ダンボールを届けてくれたのでした。

帰りに、またY男が「今日もカミイを持って行く。」すると M 子が「え～！私の家。」と言いました。「じゃあ、明日は俺の家。」と他の子供たちも自分の家に持って行きたいと言い合っていました。結局、子供たちで決め、カミイは M 子と共にバスに乗っての帰宅となりました。

チビゾウ作り

今日は、チビゾウ作りをはじめました。部屋の中にある箱を使って T 男の考えで身体や足、顔などができてきました。

ﾁﾋﾞｿﾞｳにカミイを乗せたいという思いの子供たち・・・しかし、次第に無理と分かると A 子が「こうやって、ひっぱるようにする。」R 男も「ひも、つけて。」と言いました。私は子供たちの思いを確認しつつ、手をかしていきました。できあがると、ホールや廊下へひっぱっていきました。

この日の午後、おやつの時間。すでに、みんなで食べはじめていました。M 子が「Y 男くん、カミイは？」と言いました。カミイの姿がないことに気が付いた M 子です。Y 男「あ、んだ。」と部屋からカミイを運んで、一緒におやつの時間となりました。

4読みとりと考察

電気屋さんにダンボールを歩いて取りに行くと言った子供たちに私はワクワクする気持ちでした。本当に歩いて行ったら、楽しいだろうなと思いましたが確認の電話をしてしまいました。もしかして、確認などせずに、行くだけ行ってみたら良かったのかもと後で思いました。せっかくの子供たちの勢いや気持ちをダメにしてしまったのではないだろうかと。

チビゾウ作りは子供たちの中ではカミイを乗せる、カミイの大好きな物だということで作ってあげようという思いがあったように思いました。これも絵本の中にでてくるのですが、子供たちが絵本でいろいろな事を感じて想像していることがうかがえます。絵本から具体的な形として作り上げていく子供たち。作りたいけれど、どうしようかわかんないという子もいれば、身体部分をこうしたらという考えをだした子や様々に知恵をしぼった場

面もありました。絵本の中にすっぽりというより、絵本からすっぽりといった感じで自分たちで作り上げていくカミイとの新たな世界がここにある感じがします。

おやつの時間、Ｙ男に「カミイは？」とＭ子が話した時、私ははっとしました。Ｍ子が気が付いたならば、Ｍ子がカミイをつれてくればいのにＹ男に声をかけるということは、どうしてなのだろうと思いました。カミイをＹ男のものと認めている気持ちがわき始めているからなのでしょうか。それとも、Ｙ男がよくカミイの世話をするので、Ｙ男に声をかけたのだろうかと思いました。もしかして、子供たちははじめから、カミイはＹ男が作ったんだという思いがあったのかも・・・。

～誕生会にカミイを参加させたり、壊れかけのカミイの足を治し「病院だ。」と言ったりしている子供たちです。これからの流れを追っていきたいと思っています。

つき組のお家の方へ

つき組に新しいお友だちが入りました。
ご紹介致します。毎日、給食やお昼寝を一緒にしています。今、カミイのお家を造ってあげたいと言っている子供たちです。毎日、誰かのお家にお泊まりさせてもらっています。お家に行ったらどうぞ、よろしくね。

名前　　カミイ　（ロボットカミイ）
誕生日　　６月２４日　（子供たちが誕生させてくれた）
誕生秘話　紙芝居、絵本に『ロボットカミイ』というのがあります。私はみんなに見せました。ある日、Ｙ男くんが「センセイ、カミイ　ツクリタイ。」と・・・ダンボールたくさん用意したらあっという間に子供たちが作り上げました。Ｙ男くんが中心となって作り、また、お世話もしています。でも、作る過程では、ガムテープを切ってくれた人、支えてくれた人、などがいましたし、カミイの話を知っているみんなの思いは一つになっていたと思われます。自分の家にお泊まりさせたいという思いをどうか受け止めてあげて下さい。

Ｙ男宅に一泊・・・座敷にタオルをかけて就寝。トイレに行くとき、カミイが光ったよ。と話してくれました。
Ｍ子宅に一泊・・・妹に壊されては大変だから、小屋にしまった。
など、お話も聞かせてくれています。

お家～センター～そしてまたお家へ・・・と繰り返し、一つになっている子供たちの思いや遊び、嬉しいですね。大事にしたいと感じています。

6/29